



1979年(昭和54年)

7月号(No. 409)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

『小島鳥水全集』の刊行	(近藤信行) ……………(1)
鳥海山ではじまる観光開発	(斎藤重一) ……………(2)
古い宿帖	(望月達夫) ……………(3)
井田清さんのこと(諏訪多栄蔵)	……………(3)
図書紹介	……………(4)
東西南北	……………(5)
ブラヴァンド氏の山案内手帳(最終回)	(岡沢祐吉) ……………(6)
図書受入報告	……………(7)
報告	
第379回小集会	……………(8)
北海道支部総会	……………(9)
会務報告・ルーム日誌・会員動向	……………(10)
お知らせ(婦人懇談会)	……………(10)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

▶図書室開設時間

日曜・祭日は休み
日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時～20時

▶事務室及び図書室の休業期間

8月10日(金)～8月16日(木)
職員休養のため休業します。

『小島鳥水全集』の刊行

近藤 信行

小島鳥水氏、近いて三十年。その明治・大正・昭和三代にわたる業績は、いまなお輝かしい光芒を放っている。日本の美しい自然と芸術にのこされたかずかずの先駆的な仕事には、追慕措くあたわざるものがある。

明治三十八年、城数馬、高頭仁兵衛、武田久吉、高野鷹蔵、山川黙、梅沢親光らの諸氏とともに、日本山岳会を創立し、後年、その初代会長をつとめられた小島鳥水氏は、われわれの山の先達である。日本近代における山の文学の創始者であり、山と自然と芸術を総合的にとらえようとする研究者であった。探検時代の日本アルプスをはじめ各地に足跡をのこし、十一年余におよんだ滞米時代には

シエラ・ネヴァダやカスケードの山々を探られたわけだが、その感動は美しい紀行文につづられ、高みへの憧れは氷河地形の研究となつてあらわれている。古えをおもふところは歴史文献の探索となつて多くの文章をのこされている。

しかし鳥水氏の仕事はそればかりではなかった。若き日にあつては、青年文学雑誌「文庫」の記者として縦横無尽の活躍があり、文芸批評家としての多くの述作がある。また美術研究家・愛書家としては、名著『浮世絵と風景画』『江戸末期の浮世絵』その他の研究や随想をのこされている。これらは主として横浜正金銀行勤務のかたわらの仕事であり、その精励ぶりにはあらためて驚嘆しないわ

けにはいかなが、それらはすべて鳥水その人の芸術的性情から発露されたものであった。小島鳥水氏の業績は、近代の偉観である。明治二十二年から昭和二十三年までの六十年間に書かれたものは膨大な量にのぼっている。単行書としては『扇頭小景』(明治三十二年、新声社)から遺著『山の風流使者』(昭和二十四年、梓書房)にいたるまで数多いが、そこに収録されなかった執筆文には、登山文化史および近代文学史において、研究の対象として逸すべからざるものも多い。それだけに鳥水の全体像をつかむことは、近代日本の自然と人間のかかわりをきわめることにほかならない。

このたびその業績を網羅した『小島鳥水全集』全十三巻・別巻一卷を大修館書店より刊行するのはこびととなった。鳥水全集の企画は、戦前に梓書房主人岡茂雄氏の手によってなされたときいている

し、戦後も二、三の出版社がこころみようとしたりという。しかしずれも実現にいたらなかった。鳥田巽、串田孫一、山崎安治三氏ともども日本山岳会創立七十年記念出版『覆刻日本の山岳名著』の仕事に参画していたところから、この話ほちあがってきたのだが、いま、三氏および出版社編集スタッフの協力によって、その刊行が実現されることになった。全巻の内容をかんたんに紹介するとつぎのとおりである。

第一巻 初期文集

『扇頭小景』『木蘭舟』『銀河』三著作のほか、明治二十年代から三十年代初期にかけて発表された美文・紀行・評論を収録。

第二・三巻 『文庫』時代(一)(二)

山をきれいに「三」は持ち帰る

『文庫』記者として活躍した明治三十年代の文芸評論、社会批評、歴史論、人生論などを集成。「平凡なる人間」「趣味の殿堂」「透谷全集」と子規随筆「歴史人物論」「明治文壇側面史」「破戒」を読む「何ぞ創作家多きや」「梅村騒動」「明治史の二悲劇」など、青年期鳥水のころの軌跡をあきらかにする。

第四巻 『山水無盡蔵』『不二山』ほか

日本登山史における画期的な作品『鎗ヶ岳探険記』のほか、富士山、中部山岳地帯の紀行・随想を収録。

第五巻 『日本山水論』『山水美論』ほか

興隆期日本の青年たちに大きな影響をあたえた『日本山水論』をはじめ明治三十年代の山岳研究・随想等を収録する。

第六巻 『雲表』『日本アルプス』第一巻ほか

紀行文学の傑作『雲表』およびわが国山岳文獻白眉の書といわれる『日本アルプス』第一巻に日本山岳会創立前後の文章を収録。

第七巻 『日本アルプス』第二・三巻

探検時代の日本アルプスにみかざる足跡をのこした鳥水の、壮年期の全体像を集約。

第八巻 『日本アルプス』 第四巻 ほか

探検時代の掉尾を飾る飛騨双六谷紀行のほか、日本山岳会成立後の鳥水の全逸文を収録。

第九巻 『氷河と万年雪の山』 ほか

大正四年以後、十一年余におよんだアメリカ時代の登山紀行・氷河研究・回想のほか『泰西創作版画展覧会目録』など。

第十巻 『書斎の岳人』 『アルピニストの手記』 ほか

登山事蹟、山岳文献、先輩知友についての回想、山と芸術と書物にかんするエッセイなど、昭和初期の文章を集成。

第十一巻 『偃松の匂ひ』 『山の風流使者』 ほか

山と芸術に全生涯をかけた鳥水晩年の二著を中心に、昭和十年以降の全逸文を集成する。

第十二巻 『浮世絵と風景画』 ほか

広重研究を中心とする名著『浮世絵と風景画』および明治・大正期の美術研究・随想を収録。

第十三巻 『江戸末期の浮世絵』 ほか

浮世絵芸術に正当な評価をあたえた『江戸末期の浮世絵』のほか『三世豊国大首役者絵集』『小島鳥水翁浮世絵蒐集目録』さらに昭和期の美術研究・随想を収録する。

別巻 小島鳥水研究

鳥水にかんする研究・評論・追

憶のほか、年譜・執筆目録・書誌目録・研究文献一覧など。併せて主要書簡を収録してレターライタ―としての鳥水を明らかにする。

個人全集の編集には、ジャンル別、あるいは編年体の構成が考えられるが、ここでは著者の眼のおった単行書、最終稿を底本として、その双方を加味しながら全十三巻にまとめられる。さまざまな検討をおこなった結果として、単行書を中心におくことにしたの

は、それぞれの時点で著者の趣向がこらされているからである。初版本の図版・写真等を多数収載して、初版当時の型態をつたえたかったからにはかならない。単行書未収録の文章は、それぞれの巻

に、年代別・ジャンル別を考慮して、つけくわえることになった。菊判各巻平均五〇ページの大冊となるが、読みやすさを考慮して、本文に10ポイント活字を採用、さらに造本・装幀については、愛

書家であった著者にふさわしいものをこころがけ、豪華愛蔵本を作成したいとねがっている。

初期習作時代から最晩年にいたるまでの山岳・文芸・美術等にかかわる全文章を収録し、小島鳥水氏の多面的な文藝をあらたな視点から集大成する機会にめぐまれたことは、後学のものとして大きな幸せである。かつて鳥水氏は『日本アルプス』刊行にあたって『善美を極盡せり』と書かれたことがあるが、この全集において著者の



小島鳥水像(昭和9年、茨木猪之吉画) 緒方晃氏蔵

山と芸術によせた熱情を再現し得ることができるとしたら、これにまさるよろこびはない。

この出版事業の完成に、日本山岳会諸兄弟の絶大なる御支援をお願いする次第であります。

【頒布方法その他】
第一回配本 第六巻(雲表)

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

鳥海山ではじまる観光開発

自然保護情報

斎藤 重一

東北地方の山岳の中で、比較的観光開発の荒波からとり残されてきた鳥海山にも、とうとう自然破壊をとまなう開発構想がスタートしはじめた。

昨年十月、秋田県庁において秋田県企業局の音頭とりで「鳥海山北東斜面開発連絡協議会」というものが開催された。この会議の中味は、鳥海山北東斜面(秋田県側矢島道・猿倉道上部)の標高一〇〇メートルから一七四〇メートルまでの延長約二七〇メートルの長大な索道(ゴンドラ)を設置しようというものである。索道の施設としては、支柱二十五・上、下停車場・中間停車場・カプセル格納

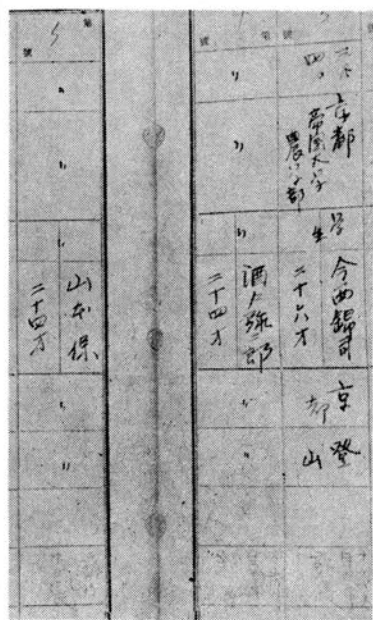
東北地方の山岳の中で、比較的観光開発の荒波からとり残されてきた鳥海山にも、とうとう自然破壊をとまなう開発構想がスタートしはじめた。昨年十月、秋田県庁において秋田県企業局の音頭とりで「鳥海山北東斜面開発連絡協議会」というものが開催された。この会議の中味は、鳥海山北東斜面(秋田県側矢島道・猿倉道上部)の標高一〇〇メートルから一七四〇メートルまでの延長約二七〇メートルの長大な索道(ゴンドラ)を設置しようというものである。索道の施設としては、支柱二十五・上、下停車場・中間停車場・カプセル格納

古い宿帖

望月達夫

「こういうものには興味がありません」と言われて、一冊の古い宿帖で出されたのは、一冊の古い宿帖であった。場所は滋賀県東浅井郡浅井町高山の高佐旅館のこと、金葉岳に登ろうという前後、四月二十八日の夕食のあと、一同がくつろいでいる時であった。

その宿帖には大正十三年以降の記載があり、表紙には近江国東浅井郡上草野村高山、高山佐太郎と墨書してあった。その昭和三年三月四日のところを開いてみると、行商人などの泊り客の氏名と並んで、京都帝国大学農学部、学生、今西錦司、二十六歳というのを目をひいた。言うまでもなく半世紀前の記録である。今西さんの名前について酒田弥二郎、山本保という名も出ている。一行は三名で目的は登山となっている。特に興味



投宿者3名の相貌を記した宿帖

のある点は「相貌別微之有無」という欄の記入で、そこには宿の主の鉛筆がきで、今西さんののは「オリバク 目ガネ 顔長」とある。オリバクはオールバックのことだろう。同様に他の二氏は、「オルバク 目ガネ 顔丸」「顔はホソ長」とあった。

帰ってから今西さんの「一千山のしおり」をくってみると、金葉岳登山は一九二八年三月五日とあるから、この記録ともピッタリ符合する。あとで今西さんにうかがったら、中津尾をショートスキーで上下した由、三月初旬ならまさにそうであったろう。

実は、この宿帖の記載を発見したのは私ではなく、会員中西章君である。同君は元来こういうものを嗅ぎ出すことには、驚くべき動物的嗅覚の持ち主であるらしい。そして私に見せてくれた上に、わざわざ撮影してプリントにまでもしてくれた。ここに掲載の写真がそ

れである。

たまたま去る五月十九日の夜、岐阜支部の集りが揖斐郡久瀬村津汲の増元屋であり、支部創立者の今西さんへ見えるときいたので、私はそこへこのプリントを持参し奥美濃の山々をこのように愛する会員諸氏にも披露した上で、今西さんに進呈した。同氏が喜ばれたのは言うまでもないが、同席した諸氏からも拍手がわきおこった。

翌日の金草岳は、今西さんにとつては十五年ぶりの再登だったというが、若葉の緑が目染みるような五月晴れの山頂で、何冊かの著書に署名を求められた今西さんは、思い出したように図義から昨夜の写真をとって出し、これにも何か書いてくれというので、裏面にJAC会員中西章撮影とかいてお渡しした。

目をあげると石南花の咲いている新緑の尾根を前景に、奥美濃の盟主能郷白山が、冠山の上におおらかな姿を現わしていた。

井田清さんのこと

諏訪多栄蔵

会員、岡沢祐吉君は、スイス山岳会々員であったと思うが、スイス・アルプスの案内書を訳したり、スイスを訪問したりしている。一九七八年のスイスの前山は七月でも降雪がひどいシーズンであったという。

岡沢君はグリンデルヴァルトに

フスマ・チョウカイアザミ・ヤエウラゲハクサンシヤクナゲなどもこの一帯に生育している。

秋田県の出た出た索道構想は、昭和五十六年完成をめどとしているが、これらの湿原植物・高山植物の真上を直線で切り裂こうとしているのである。

かつて、資源開発と称して鳥海山の裾野のブナ原生林の大部分が乱暴な林野行政の餌食となつたとき、私たち山を愛する者たちはただ呆然と見つめているだけだった。とても組織的な自然保護運動をまき起すだけの力がなかった。しかし、前述のように秋田県が鳥海山の頂上直下まで索道を設置して、一年間に十五万人から二十万人の観光客を誘致するのだという構想が具体化していくのを私はや坐視することはできなくなった。

いま秋田では、この観光開発を阻止すべく実に多くの岳人が結集しつつある。そして、山を愛する山麓の住民、自然保護団体が一緒になって「鳥海山の自然を守る会」の発足にとり組ん

自然保護情報

ブラヴァント氏を訪ね、山案内人手帖を見せてもらい、写真におさめたのだが、これらの手帳の中に、北海道大学の井田清さんの記録をした部分があった。かつて岡沢君が拙宅に見えたときみせた、「ケルン」にのつた、氷雪講習会

でいる。

すでに、山形県側の「出羽三山の自然を守る会」「鳥海山の自然を守る会」との連けいもとれ、共に鳥海山の自然を今以上にすばらしいものにしていくと誓い合っている。ことし四月には「鳥海山北東斜面開発」阻止と鳥海山の自然を守ろうとする大きな集いが開かれそうだ。

もともとこの構想の発端は、全日本スキー連盟の要請を秋田県が受け止めた形であるだけに、これに反対する秋田県山岳連盟と秋田県体育協会との見解をいかに調整するかという問題もあるし、過疎と出稼に悩む地元(矢島町)の観光開発に賭ける意気込みなど、むずかしい事もあると思うが、私たちはなんとか山の自然を破壊することをやめさせたいとして立ち上がった。

鳥海山を知る全国の方々の大きな応援をお願いします切なるものがある。
(秋田支部)

の話をしたのかと思う。

井田さんは日本山岳会の会員であったと思うが、私が昭和六年に求めた「山岳」二十六号二号の「雑録」欄で「Hans Morgenthau」に就いてをよみ、兵営内で愛読をした。

ハンス・モルゲンターラー (略
移ハ・モ) の著書は四冊であると思
う。

Ihr Berge, 1920. Zürich:

Orell Füssli, s. 144

Matahari, 1921. Z.: O.F.

s. 303

Ich Selbst, Gefühle, Z.:

O.F. s. 171

Woly, Sommer in Süden

(Roman), 1924. Z.:

O.F. s. 228

第一著は「山」荒井道太郎訳
(昭一六、朋文堂)

またカール・エッガーの追想が
「ディ・アルペン」一九二八年に
のり、ジョージ・アングル・フィ
ンチ「登山家の素質」の中の「テ
ディ・Toldiの冬の夜」に、一九
一一年、ハ・モとともに強制露営
をしたとあるが、このときハ・モ
は手足の指を失う。

その後、ハ・モは地質学者とし
て、マレイ、サイアムの熱帯の調
査を行った。指のない手で、ハン
マーをもち、顕微鏡をのぞく苦勞
は、なみ大抵ではなかったであろ
う。この紀行、

MATAHARI, 1921. Z.: O.F.

は、かってヘルマン・ヘッセの
激賞をうけたという。マタハリと
は、かつての女スパイの名として
有名であるが、先年バンコックで
土地の老人にマタ・ハリは「マレ
イの太陽」かときいたら、顔をほ
ころばせてくれた。

ハ・モが指を失ない、苦悩の人
生を歩むのは、「単独行」「岩水
晶」の短章に、美しくちりばめら
れている。また血続きの画家エル
ンスト・モルゲンターラーの絵
が、わが国の「アトリエ」という
雑誌に出ていた。

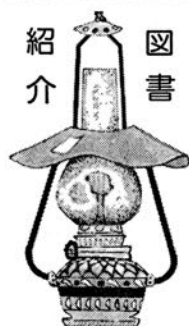
井田 清さんは詩集「山」を、
一九三一年札幌の「山と雪の会」
で上梓された。一九二五—三〇年
の作である。三百部限定版。

たしか上京して牛込区に住んで
おられ、御家族の写真もいただい
た。近くに知人がいて、さがした
が、わからず、お目にかかれなか
った。書簡はまだどこかにある筈
である。また北大山岳部報第二号
「三月の利尻岳(山が正しい)」、
同三号に水本文太郎さんのことを
書いておられたと思う。赤岩の岩
登りもあった。「山とスキー」の
続刊「山と雪」にも御寄稿があっ
た。

また「ケルン」誌に、スイス山
岳会の「氷雪講習会」に出場した
記事もある。
スイスにまわられたのは、ドク
ター・アーノルト・グブラー(た
しか北大講師)さんたちの融通が
あったものと思う。

先年ブラヴァントさんが来日の
ときは、横さんと御一緒にお目に
かかったが、失念してて手帳の
ことが話題にのぼらなかつたのは
残念であった。岡沢君の発見はう
れしいことであった。

図書



紹介

続・文庫に

入っている山の本

相変らず文庫本ブームである。

いや現状はブームだなどと言で
片づけてはいけなないのであろう。
それほど、この文庫本の氾濫は、
出版界にすっかり定着してしまっ
た感がある。何しろ文庫判の辞書
まで出るというのであるから。

文庫本の全盛期とも思われる現
在、いままでは新しい現象が
現われてきた。従来文庫本という
ものは、社会や読書界から一定の
評価を受けたものが型を変えて、
多くの人に長く読み継がれていく
必要性から刊行された、と云える
ものであった。しかし最近では単
行本から文庫になるスピードが非
常に速くなった。ベストセラーが
すぐ文庫になる。評価が定まるあ
る一定の時間だけ待つということ
がなくなってきた。しかもその反
面、例え文庫本に入っても、売れ
ないものはどんどん姿を消して行
く。

また、いきなり書き下ろしが文
庫本として出版されるようになって

た。講談社学術文庫にそれが見ら
れるし、山の本では、柳本香美著
「ヒマラヤの村」(教養文庫)が
そうである。

この約一年間に出版された文庫
版の山の本は次の11冊17冊の多
きを数える。かつて山岳書が短期間
にこんなに文庫本化されたことは
なく、これも今の出版界の異常と
も云える。文庫本時代の恩恵と
云える。

ここには前回と同じく書誌的な
ことを中心にリストを作成した。

(1) 極北に駆ける 植村直巳 二三
八頁 二四〇円 昭和五十二年
十一月二十五日発行 文芸春秋

昭和四十四年九月から翌四十八
年六月まで、グリーンランドのエ
スキモー部落での生活と、最初の
単独大樺行の記録。元版は同じ文
芸春秋から昭和四十九年七月に出
版された。

(2) 喜作新道 山本茂実 三七二頁
三八〇円 昭和五十三年一月三
十日発行 角川書店

喜作新道を開いた北アルプスの
名氣師小林喜作を中心に、当時の
山男たちをドラマチックに描いて
いる。元版は昭和四十六年十月朝
日新聞社から書き下ろし刊行、文
庫版には、著者の「角川文庫版刊
行にあたって」と尾崎秀樹の「解
説」が付いた。

(3) チベットの旅行記 河口慧海 六
六八頁 六六〇円 昭和五十三年
四月十五日発行 旺文社

明治三十七年、博文館から刊行
された元版を底本にしているが、
本書の「はしがき」で断わっている
通り、「チベットとロシア」な
ど八章を削除し、他の章でも削除
した部分がある。従って厳密に云
えばダイジェスト版である。巻末
に壬生台舞の「解説」と河口慧海
年譜がついている。

(4) 山—随想— 大島亮吉 二五二
頁 三〇〇円 昭和五十三年五
月十日発行 中央公論社

最も代表的な山岳文庫の一つで
これまでにもさまざまな型を変え
て出版され、多くの人々に愛読さ
れてきた。しかし文庫本になった
のはこれが初めてである。昭和五
年三月岩波書店発行の元版から、
雪崩の研究四編と、アルプスの山
名に関する論文が省かれている。
「解説」は三田博雄が担当執筆し
ている。

(5) チベットの旅行記(二) 河口慧
海 第一巻 一八二頁 二八〇
円 昭和五十三年六月十日発行

第二巻 一九三頁 二八〇円
昭和五十三年七月十日発行 第
三巻 二〇二頁 二八〇円 昭
和五十三年八月十日発行 第四
巻 二〇九頁 二八〇円 昭和
五十三年九月十日発行 第五巻
二一三頁 二八〇円 昭和五十
三年十月十日発行 講談社

博文館版(明治三十七年発行)
を底本に、昭和十六年山喜房仏書
林発行の改訂版を参照し、表記を

英訳本によって統一した。文章の削除もなく、挿し絵も全部収録している。その他底本の誤りを訂正加筆してあり、その意味で、本書が、定本「西蔵旅行記」といえる。第五巻々末に高山竜三による「解説」がある。

(6) アフガニスタン紀行 岩村忍 二二二頁 三二〇円 昭和五十二年六月三十日発行 社会思想社

昭和二十九年三月七月に行なつたトルキスタンヒンズークシ旅行の記録。元版は昭和三十年九月、朝日新聞社から出版。本文庫には勝藤猛の「解説」がついた。

(7) 私の自然観 今西錦司 二四九頁 三二〇円 昭和五十二年九月十日発行 講談社

本書は、「山岳省察」「山と探検」に次ぐ山の随筆集で、元版は昭和四十一年筑摩書房から刊行された。巻末の「解説」は吉良竜夫が書いている。

(8) 日本百名山 深田久弥 四三三頁 四〇〇円 昭和五十二年十一月二十七日発行 新潮社

本書は戦後発行された山岳書の中でロングセラーの代表的なものである。多くの人々に愛読され、これからも数多くの人達に色々な影響を与えて行くだろう、なお元版に挿入された口絵写真は、初刷から十九刷までがモノクロ四葉、第二十刷からカラー十九葉になった。この文庫版では、口絵写真は

無論のこと、本文写真も大部分が新しくなり、また地図も一部手直しされている。「解説」は串田孫一が執筆。

(9) 忘れえぬ山ⅠⅡ 串田孫一編 第一巻 三六〇頁、四〇〇円 第二巻 三七四頁、四二〇円 第三巻 三八〇頁、四二〇円 各巻 昭和五十二年十二月一日発行 旺文社

これまでに書かれた多くの紀行文の中から、心に残る名篇を選んだアンソロジー。各巻末に編者が新しく「後記」を書いた。元版は昭和三十四年筑摩書房から発行、その時挿入された写真は本文庫では省かれている。

(10) アルプスの谷アルプスの村 新田次郎 二六九頁 二八〇円 昭和五十四年一月三十日発行 新潮社

同じ新潮社から昭和三十九年に出版されたものの文庫判。元版本文中にあったカラー写真は除かれて

いる。

(11) 日鷲の山ひなたの山 上田哲農 二四六頁 三二〇円 昭和五十四年二月十日発行 中央公論社

元版は昭和三十三年朋文堂から刊行された。この文庫版では元版にある絵が若干省かれている。巻末に芳野満彦の「解説」がついた。

(12) 山の随筆 今西錦司 昭和五十四年二月二十五日、二六四頁 三四〇円 旺文社

「山岳省察」から「自然と進化」まで六冊の随筆集から山に関する四十二篇を収録。巻末の「解説」は望月達夫が書いている。

(13) 漢 冠松次郎 昭和五十四年四月十日 二八四頁 三四〇円 中央公論社

元版は昭和三十七年七月筑摩書房から千部限定で出版された。谷を中心とした紀行と随筆集である。巻末の「解説」は西堀栄三郎会長が執筆。(岩瀬皓祐)

徳本峠越えのウエストン祭

早乙女緩次

昭和二十二年から始まったウエストン祭という素朴な山の祭に、私はかれこれ二十八回位は出掛けたろうか。そしてその大

東西南北

とって、この道こそは先人達が残した、歴史の踏み跡を偲ぶにふさわしい。遠く長い道程ではないだろうか。島々谷の清流を賞でながら、緑濃き幽谷に分け入る。くたびれれば、雪解け水の谷川に顔をひたし、草のしとねに憩えたい。腹が空く頃には、古びた岩魚留小屋の囲炉裏に足を踏み込み、山ウドの煮物や山菜のオヒタシをおかず

に、舌つづみを打ちにぎり飯をほおばる。相変らずの薪丸太の煙に涙して、障子戸越しに望む溪谷の空は青く澄み渡り、溪流の瀬音は快よりリズムを奏でる。



前後泊まった島々宿の旅籠を七時に発って既に四時間は経過していったらうか。早昼を終えたと正午にはこの小屋を発った。

岩魚留の名のごとく、ここから峠へむかう沢筋の道程は、幾分勾配を増していく。同行の仲間の口数が減り、激しい息づかいがこれに代わる。谷川の清流はより冷たさを増し、清涼感をあおる。

最後の水場に到着する頃、抜きつ抜かれた旅人達は、みな親しき友人となって、それぞ

れに山行の喜びを語り合う。この水場からの登りが、胸つき場となって一行を苦しめ、峠は遥か見上げる樹間に待ち受けている。

この時、一瞬にわかにかき曇り、空から木の葉を打ち抜く大粒の雨が降り出した。それと同時に激しい雷鳴は遠く近く、前後左右の山稜を覆う雨雲の中に地響きを立て、不気味に消えて行った。山道はたちまち電積の白き冬の道に変わりてしまっ

午後三時、私はいつものように峠に着き、穂高の山並と対座していた。峠を吹き抜ける風は冷たい。眼前に浮かぶ連峰の景観は、古と変らぬ遅い春の雪景色であり、峠を覆うタマ笹の葉裏には、未だ豊かな残雪が控えていた。

峠の小屋の炬燵に入りこんで、馴染みの小屋びと心づくしの山菜料理が運ばれてくると、誰れとはなしにリュックサックに忍ばせたウイスキーの瓶がコタツ板の上に置かれる。

雨に煙る明神岳の勇峰がことの他その美しい姿を醸す夕暮れ私は峠の小屋を後に、上高地への下り道を今年も無事辿った。

1960

37. P. Petzoldt, "On Top of the World", Collins, London, 1954
38. A.A. Ratti, Transl. J.E.C. Eaton, "Climbs on Alpine Peaks", Ernest Benn, London, 1929 (3rd. ed.)
39. D. Roberts, "The Mountain of my Fear", The Quality Book Club, London, 1968
40. S. Russell, "Mountain Prospect", C. & Windus, London, 1946
41. L. Schuster, "Postscript to Adventure", Eyre & Spottiswoode, London, 1950
42. G.A. Smith, "Introduction to Mountaineering", Castle Books, New York, 1967
- F.S. Smythe:**
43. "Peaks and Valleys", Adam & C. Black, London, 1938
44. "A Camera in the Hills", A. & C.B., 1942
45. "Alpine Ways", A. & C.B., 1942
46. "The Mountain Vision", H. & Stoughton, 1946
47. "Snow on the Hills", A. & C.B., 1948
48. "Swiss Winter", A. & C.B., 1948
49. "Mountains in Colour", Max Parrish & Co., London, 1949
50. H.E.M. Statfield, J.N. Collie, "Climb and Exploration in the Canadian Rockies", Longmans, Green &

Co., London, 1903

51. P. Steele, "Two and Two Halves to Bhutan", Travel Book Club, London, 1970
52. S. Styles, "The Foundations of Climbing", S. Paul, London, 1966
53. D. Talbot ed., "A Treasury of Mountaineering Stories", P. Davies, London, 1955
54. O. Tchernine, "The Yeti", N. Spearman, London, 1970
55. S. Turner, "Siberia, A Record of Travel, Climbing, and Exploration", T. Fisher Union, London, 1905
56. D. Wall, "Rondoy", J. Murrey, London, 1965
57. A. Wilson, "North from Kabul", G. Allen Union, London, 1961
58. E. Whymper, "Scrambles amongst the Alps in the Year of 1860-69", T. Nelson & Son, London
59. C. Wyatt, "The Call of the Mountains", T. & Hudson, London, 1962
60. G.W. Young, "On High Hills", Methuen & Co., London, 1927 (2nd. ed.)

以上及び会報 400, 401 号報告分 No. 1~66. 計 126 冊は A. J. Astill 氏 (Winchester, England) から購入したものです。

ブラヴァンド氏の

山案内人手帳 (8)

岡沢祐吉

田口一郎・二郎氏の山行

26. 8. 1939

p. 150-152

12. 8. 1939 Zinalhorn by the Rothorngrat

rat

14. 8. 1939 Matterhorn by the Zmuttgrat

16. 8. 1939 Dent d'Hérens

18.-20. 8. 1939 Marinelliütte, Macunaga, came back again owing to the bad weather

bad weather

We were again with Sami & had some marvellous climbs. He was as good & kind as before but even his skill could not bring the fine weather at Cabana Marinelli. It was a great pity. Still it is & will be the

Föhn cannot spoil our happy time in the mountain.

I. Taguchi

J. Taguchi

S.A.C. Grindelwald

一九三九年

八月十二日 ロートホルン稜からツィナールロ

ートホルン

八月十四日 ツムト稜からマッターホルン

八月十六日 ダン・ド・ヘレン

八月十八ー二十日 マリネリヒュッテ、マクナ

ガ、悪天候のためまた戻って来た

僕たちは、またザミと一緒にいくつかのすばらしい登攀をした。彼は以前と同じに上手で、親切だった。だが彼の熟練をもつてしても、マリネリ小屋によい天気をもたすことはできなかった。大変に残念だ。だが、彼とともに登れるのはうれしいし、これからもそうだ。山での幸せな僕らの時間を、フェーンだつてだいなしにすることはできない。

田口一郎 東京
田口二郎 東京
S.A.C.

S.A.C.

グリンデルヴァルト

一九三九年八月二十六日

前の年、天気が悪くて中

止したヴァリスでの登山

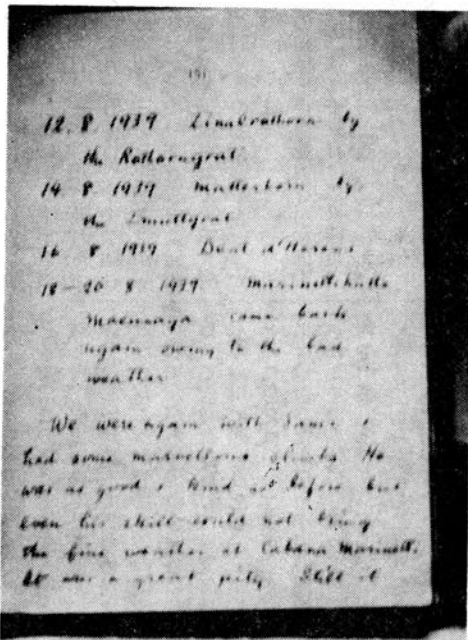
を、この年も数多くねらわ

れたのだから、再びフェ

ーンもよいの悪天候に見舞

われ、僅か三つで中断されている。

〈山案内人手帳〉 151~152 ページ



図書受入報告(続)

購入洋書(昭和 53 年度)

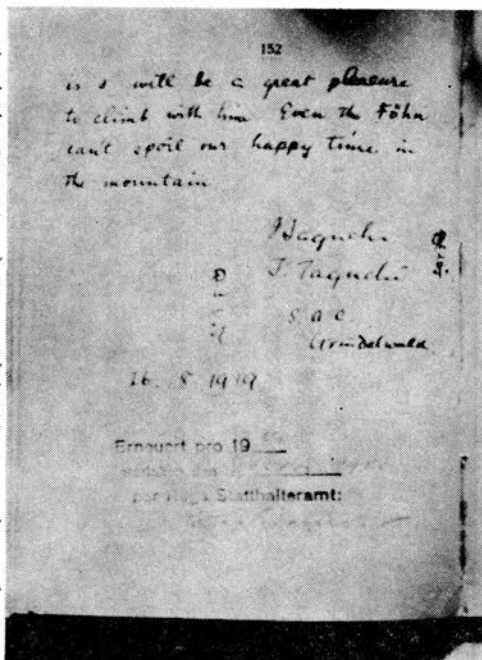
図書委員会

16. J. Euller, "Arctic World", Abeland-Schuman, London, 1958
17. C. Evans, "Eye on Everest-A sketch book from the Great Everest Expedition", D. Dobson, London
18. N. Farson, "Caucasian Journey", Evans Brothers, London, 1952 (repr.)
19. W. Eortescue, "Mountain Madness", W. Blackwood & Sons, London, 1944 (2nd. ed.)
20. P. Goullart, "Forgotton Kingdom", Johon Murray, London 1955
21. D. Haston, "In High Places", Csell, London, 1972
22. A. Heckmair, Transl. G. Sutton, "My Life as a Mountaineer", V. Gollancz, London, 1975
23. Sir J. Hunt, C. Brasher, "The Red Snows", The Travel Book Club, London, 1960
24. E.F. Knight, "Where Three Empire Meet-A Narrative of Recent Travel in Kashmir, Western Tibet, Gilgit, and the Adjoining Countries", Longmans, Green & Co., London, 1893 (3rd. ed.)
25. G. Kogan & N. Leininger, "The Ascent of Alpa-mayo", G.G. Harrap, London, 1954
26. H. Kopp, "Himalaya Shuttletcock", Hutchinson, London, 1957
27. G. Krist, Transl. E.O. Lorimer, "Alone Through the Forbidden Land-Journeys in Disguise through Soviet Central Asia", Reader's Union, London, 1939
28. J. Kugy, Transl. H.E.G. Tyndale, "Alpine Pilgrimage", J. Murray, 1934
29. W. Leifer, Transl. U. Prideaux, "Himalaya-Mountains of Destiny-A Study in Geopolitics", Galley Press., London, 1962
30. H. MacInnes, "Call Out", H. & Stoughton, London, 1973
31. H. MacInnes, "Death Reel", H. & Stoughton, London, 1976
32. Rev. H. MacMillan, "Holidays on High Lands", MacMillan & Co., London, 1869
33. H. Marshall, "Men Against Everest", Country Life, London, 1954
34. P. Mazeaud, Transl. G. Sutton, "Naked before the Mountain", V. Gollancz, London, 1974
35. C.D. Milner, "Mountain Photography", The Focal Press., London, 1945
36. M. Morin, "Everest", G.G. Harrap & Co., London,

ブラヴァンド氏の山案内手帳(8)

八月十二日のツイナルロートホルンは、ロートホルン稜からと書かれているが、これは南西稜であり、すでに横さんはじめ何名かが登られた尾根である。十六日のダン・ド・ヘレンについては、田口さん達の外に登った日本人の記録を見ていないので、確かなことはわからない。この山は一八六三年メルヒョールなどによって登られ、以後一九六四年の冬期初登攀まで、色々なルート、色々な方法で登られている。

八月十八日のマリネリヒュッテはモンテローザ山群、デフオウルシエピッツェの東北東にあるイタリアの小屋で、ここからはマクナガフランケをねらうことになる。デフオウルシエピッツェの東側に張り出すこのフランケは、アルプスの中でも大変美しくそして高い壁として知られ、古くはF・イムゼンク、H・ブルゲナーの二八七〇年代から、一九六七年の冬期初登攀まで、多くの特にイタリアの登山者が活躍する場所となっている。当時この辺まで入り、マクナガの岩壁をねらった日本人の実力は、日本の登山界を代表する一つのピークだったのではない



田口一郎・二郎両氏の筆跡

いかと思う。田口さん達のことを知らず、マクナガフランケなど聞いたこともない日本人のアイガー北壁登攀者もいることだろう。

田口二郎・高木正孝氏の山行

p. 154

When the war came in 1939, Mr. Samuel Brawand determined to close this book during the hard war-time, in order to give more opportunities to the young generations of the profession. It was only in the summer 1944 that we succeeded to persuade him to lead us again on rocks & ice. As the matter of fact, we were shrewed enough to propose to him the "Westgrat Wetterhorn", of which he surely has some grand memories of the first climbing 16 years ago. Again we were on a rope together & I felt as sure as possible with "Sami". "Sami" was as steady & skillful as once in the north wall of the Schreckhorn. It was simply pleasant to be able to see "Sami" again, cutting ice with his excellent rhythms and movement. We again enjoyed the climbing & "Sami's" guiding throughly. We should like to thank him for both of them as usual & believe & hope this won't be the last time.

July 1944. (Tokyo)

Jiro Taguchi

Chaka Takagi

△一九三九年戦争になり、サムエル・ブラヴァ

報告

第三七九回小集会 御在所岳藤内壁

ことの発端は、昭和五二年の年次晩餐会の席上であつた。高田、湯浅、中世古の東海支部勢のテールに、渡辺兵力・近藤等の両氏が同席された。その時たまたま御在所岳岩場に於ける岩登り競技会の話が出て、両氏に機会を作るから是非一度御在所岳の岩場を訪れて下さいということになった。その時は酒の勢もあって気軽に申出たのであるが、仲々実現することもなく、時が経ってしまった。ところが昨年暮の支部長会議の席上、どこかの支部で現地小集会をやってもらいたい旨の話が出たので、支部長代理として出席していた私は、それを受けることにした。早速当時の集会担当の中川理事に來名していただき、期日を五月一日、二〇日と決定した。

五月一日、ブラザーミシンの好意で利用させていただいた同社の湯の山々荘に、今回の参加者中、最年長の角口大先輩が受付第一号にて、以後続々とつめかけ、東京勢の到着を待つて夕食を始めた。菰かぶりの一斗樽がハンマーとハーケンで威勢よく開けられ、尾上東海支部長の歓迎挨拶、渡辺副会長の挨拶、今西関西支部長の音頭で乾盃後、賑やかに会食、夕食後も小部屋にすし詰めとなり、渡辺、金坂、今西さん等を

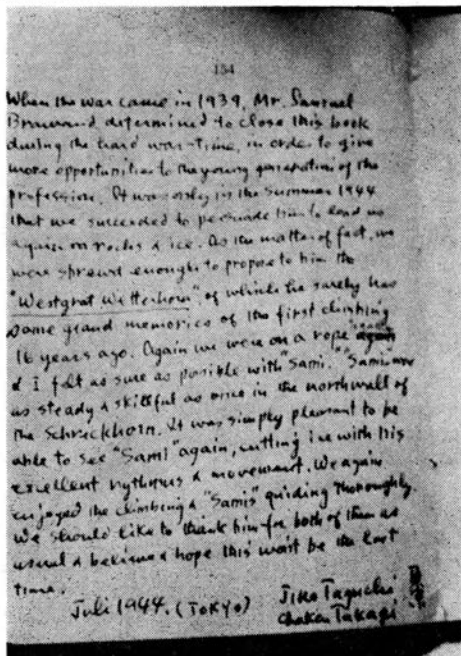
囲んで、夜の更けるのも忘れて飲談した。

翌くる二〇日も素晴らしい五月晴れに恵まれ、三〇数名が裏道をたどって藤内壁に向かった。好天の五月の日曜は、一年を通じ最もクライマーが多いので、いささかレンデでは致し方ない。

勝手知った関西勢の一部を除き、後は全員藤内壁で最もポピュラーで、また見晴らしの良い前尾根に登ることにした。当日岩登りが初経験の会員から、戦前からのクライマーまで新緑に映える岩壁を同じようにアンザイレンして攀じた。角口、渡辺の両先輩は、さすが若き日鳴らしたクライマーだけあって、私達の予想より遙かに安定したクライミングをされるので大変感心させられた。

当日登攀終了点と決めた通称やぐらのコルに、トップパーティーとラストパーティーでは一時間半程の差がついたが、全員無事ゴールイン、最後のやぐらピークはまいて全員で頂上に向かった。頂上公園に出れば、そこは観光客の領域である。頂上ホテル前の芝生で休憩し、ビールで喉をうるおした後、カモシカセンターの会員でもある丸山さんの口ききで無料でセンターを見学、日中友好ムードの

—ブラヴァンド氏の山案内人(8)—



＜山案内人手帳＞ 157ページ田口二郎・高木正孝両氏の筆跡

ブラヴァンド氏の山案内人手帳は、一四九ページからこの一五四ページまで、田口さん達の記録だけで埋められていた。インটারレーン所轄官庁のおこなった更新の署名も、一九三九・四〇年と続けて田口さんの記録したページにのみ記されている。もう客足も遠のき、中立国スイスも世界大戦の影響を受け始めた証拠、ともいえるだろう。

赤い表紙の山案内人手帳を開けるブラヴァンド氏の大きな手に、いくすじもの深いしわが寄っていた。あるときは滑り落ちるポールを、またあるときは走るザイルをくい止めた、思い出を綴るしわなのだろう。

「巴里が陥ちたときは、感慨無量悲しくなりました」(会報九十七号)と田口一郎さんは書き「どうしてこうも心を惹かれるのか」(会報八十七号)と遙かベルリンから高木正孝さんはグリンデルヴァルトに思いを馳せた。それは「山ばかりでも、人ばかりでもない」(会報八十七号)何かがそうさせたのに違いない。

私はソファに坐る老夫妻を写真に納めてからブラヴァンド氏のお宅を辞した。田口さんの墓へ行ってみようという気になったのも、それを当然とする何かが、私の気持の中にあつたからだろう。「順序よく並んでいるからすぐわかる」ブラヴァンド氏はそういって、老夫婦とともに私を外まで送り出してくれた。「日本の友だちによろしく」との挨拶だった。

一緒にザイルをつなぎ、僕はザミとの呼吸をしっかりと合せた。ザミはシュレックホルン北壁のときと同じように着実で、技術も立派だった。すぐれたリズムと動きで氷を切るザミを再び視ることができ、本当にたのしかった。登攀もザミの案内も、再び充分たのしかった。その両方について、僕らはいつものように彼に感謝したい。そしてこれが最後とならないように信じ、そして望みたい。

(東京)

田口二郎
高木チャカ

(おわり)

今日この頃、アメリカ産ロッキーの白かもしかについて、何時の間にか中国産のも入っている。センターを出た所で、東海支部の勧告で改善された浄化槽の一部を見学後、全員裏道より下山した。

なお今回参加の四八名中、愛知、三重両県外から二〇名の参加を得て、この種の小集会としてはまずまずの成績であったと思う。これもひとえに、本部及び関西の集会担当者の力強い協力と感謝しています。また終始協力いただいた愛知学院大学山岳部、裏方で好きな酒も飲まずに面倒な仕事をやってくれた丸山、小川の両氏には厚く御礼申し上げます。

なお集会終了後、次回はこちらから谷川岳あたりへ出かけて、関東の会員の皆様と親しくザイルを結び合おうと話合っています。

(参加者) 渡辺兵力、金坂一郎、神崎忠男、加藤隆、上飯屋正和、村木富士、坂本正智、国見利夫、入沢都夫、池田智津子、大木淑子、今西寿雄、角口想蔵、富田健一、阿部和行、酒井耕三、吉見孝、守田治夫、尾上昇、湯浅道男、中世古隆司、丸山昭一、小川務、木村孝保、高田光政、橋村一豊、池沼慧、梶田民雄、酒井敏士、柿下哲雄、梅田浩生、山本英明、影山淳、中世古直子、中田晴紀子、小川みはる、加藤雅代、尾崎隆、伊藤賢治、越山直昭、市橋隆二、新橋純一郎、片桐正登、愛知学院

大学山岳部五名。

(中世古隆司)

北海道支部

総会報告

北海道支部総会は、五月二十八日、札幌雪印パーラー三階会議室で開かれ、昭和五十三年度事業報告、収支決算承認。昭和五十四年度事業計画、収支予算を承認され支部費納入については、払込料金加入者負担の場合は、領収証を送らないものと決まりました。

支部役員については、前年度に引続き再任、新たに松沢節夫氏が支部委員に補充選任された。

○新年度事業計画

○八月三日、四、五日 トムラウシ山、クワンナイ沢コース

○十月六日、七日 お月見の会小樽市天狗山の周辺

○十一月中旬 スライド、8ミリの会 札幌市内

○一月十二日 新年交礼会

○二月 ニセコスキーバス

等、日程を決め、引続いて行われた懇親会には、折良く北海道旅行で、札幌に着かれたばかりの今西錦司前会長を迎え、賑やかな五月の夜であった。

(出席者) 松沢節夫、浅利欣吉、朝比奈英三、小栗宏、平野明、横江一郎、織笠蔵、柳田凉子、泉亮、萩千賀、井手貢夫、赤石喜恵子、兼平治水、淡川舜平、新妻徹、石井忠雅、高沢光雄、今村朋信、

今西錦司(出席順)

会務報告

5月理事会

5月14日午後6時30分 本会ルーム

▽出席者 西堀会長、折井、渡辺、各副会長、宮下、中島、飯野、中川、高木、菅沢、岡沢、小倉(厚)、鈴木、山口、越田、川上、嵯峨野、高橋、中村各理事、片岡監事、山崎、金坂、小原(晴)各評議員

委任 大森、倉知各理事

▽議案 新役員による初の理事会で西堀会長のあいさつにより開会。会長あいさつの要旨(抱負)は次のとおり。

1 本会ルームの活用をますます友好的に発展させ、よりクラブ的ムードを助長する場にしたい。

2 昨年度に発足させた科学研究委員会を本年度は一段と活発化させたい。

3 海外の国々との接触に対しより一層の関心度を高めてほしい。

4 婦人部の活動を活発にするよう努力されたい。

5 財務を拡充する方策を検討されたい。

▽議案

・昭和54年度理事の役員分担につ

いて (折井)

総務 宮下秀樹、中島信一 財

務 飯野亨 集会・支部 中川

武 山研 高本信子 学生部 菅沢豊蔵

会報 岡沢祐吉 山日記 小倉厚

海外・自然保護 鈴木邦之 医療 大森薫雄

山岳編集 倉知敬 婦人懇談会 山口節子

図書・書評 越田和男 高所登山・遭難対策 川上隆

指導 嵯峨野宏 青年懇談会 高橋聡

科学研究 中村純二

常務理事の選任について (折井)

宮下、中島、飯野、中川 承認

常任評議員の選任について 総会後の評議員会で決定

山崎安治、金坂一郎、小原晴子 村木潤次郎、大塚博美

日中交流登山に関して(宮下) 本会責任者を渡辺兵力副会長と

承認

▽報告その他 (鈴木)

・自然保護 5月25日大台が原自然保護につ

いての要望書を奈良県に提出

・科学研究 6月12日講演会、8月4・5日

鳥海山で高山植物を見る会を開催する予定

ルーム日誌 (54年5月)

9日(水) 自然保護委員会・婦人懇談会研究会

10日(木) 指導委員会

11日(金) 総会(於私学会館)

14日(月) 指導委員会

15日(火) 自然保護委員会

16日(水) 三木会

17日(木) 新旧役員交歓会(於私学会館)

18日(金) 学生部リーダー会

21日(月) 山日記後援会

22日(火) 婦人懇談会

23日(水) 長谷川恒男氏報告会

24日(木) 図書委員会

29日(火) 婦人懇談会・青年懇談会

31日(木) 会報編集委員会 今月の来室者五〇〇名

退会者 荒尾 宏

四四六 小椋光則

七〇七八 梶浦政信

六八八四 夫婦会員

四二六四 白石よしこ

改名 六三八七 萩 千夏子・千賀

物故者 一一九一 渡辺公平(5・11)

一三九四 児島勘次(5・19)

一六一〇 中村 謙(5・28)

支部変更 四五四〇 石村実(その他・岩手)

六九九一 西宗昭(北海道・その他)

七八三一 堀口丈夫(その他・山梨)

八三二九 木辺正夫(その他↓東
九州)
六一八六 上条清明(信の↓東京)

お知らせ

ビール・パーティー

今年の夏もビールパーティー
を開きます。

日時 8月18日(土) 午後

4時から

場所 日本山岳会ルーム

会費 一〇〇〇円

みなさまお誘い合せの上、
ご参集ください。

(婦人懇談会)

●脱字等の正誤 会報四〇六号7頁上
段27行目「史料として」の後に「珍重
されて来たものだが、本書は新発見の
別史料によって」を加える。

四〇八号6頁上段13行目「実現」は
「実況」の誤り、14行目「顔を見合」
と15行目「と、吹雪」は行が逆。11頁
復活会員小林善弥とあるのは小松善弥
氏の誤りです。二校が校了となるので
誤植皆無となるのは無理のようです。
●催しの通知は、催しの行われる前月
をもって会報掲載を締切る慣例です。

昭和五十四年七月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(26) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂二丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂



■日本を代表する山岳写真家が撮り切った
秀麗な山岳美!

日本山岳写真集団作品集

北アルプス

荒川紀一／内田良平／石橋睦美／白簇史朗／
竹ヶ原陽一郎／横山 宏／近藤辰郎／山下喜一郎／
水谷章人／岩橋崇至／三宅 修／尾白明夫／小森康行

絶賛発売中!! 定価8000円

造本
体裁

●判型／A4判正寸(縦29.7cm×横21cm) ●表紙／特漉きクロス装
●内容／オフセット多色刷92点144頁・二色刷8頁・単色刷40頁、
総頁192頁 ●カラー写真張りダンボールケース入り

実業之日本社 〒104 東京都中央区銀座1-3-9 電話(562)4311 振替東京1-326